詩的言語が萌える頃

森崎和江

◉葦書房

詩的言語が萌える頃

森崎和江

はますげ（莎草）
Cyperus rotundus *L.*

◉葦書房

森崎和江

1927年生まれ。福岡女子専門学校卒。
詩誌『母音』を経て文筆で暮らす。
主な著書　詩集『かりうどの朝』（深夜叢書）『森崎和江詩集』（土曜美術社）『からゆきさん』（朝日新聞社）『こだまひびく山河の中へ』（朝日新聞社）『湯かげんいかが』（東京書籍）『悲しすぎて笑う』（文芸春秋社）『トンカ・ジョンの旅出ち』（日本放送出版協会）『大人の童話・死の話』（弘文堂）その他。

詩的言語が萌える頃

一九九〇年八月十五日初版印刷
一九九〇年八月三十日初版発行

著者　森崎和江
発行者　久本三多
発行所　葦書房有限会社

福岡市中央区赤坂三丁目一番二号
電話　福岡　〇九二(七六一)二八九五
振替　福岡　一―三九四三〇
印刷
製本　凸版印刷株式会社

価格はカバーに表示してあります。

落丁・乱丁本はおとりかえいたします
0095－9021－0135

双面の鬼女

毎日炊事場に立ってその日の食事を作っていると、かつて味わったことのなかった感覚が、すこしずつ太ってきているのを感ずる。それは、野菜や魚肉をくるんであるビニールを、引裂いて丸めて捨てるときの、いいようのない不快さに起因している。それが変質して土へ還ることのない物質の、巨大な影であるかのように、ぐにゃりと流しのあたりで崩れるとき、異様な幻影が湧く。

一方で、このところ、布きれに執着している。野菜をくるむビニールのような紙おむつではなくて、幾度も水をくぐった浴衣の、糸も細くなった柔らかな布である。赤ん坊のお尻をくるむように肉体にふれて、死にゆく者のいのちをも包みこみ、ともに土に還る木綿布。手にとって眺めているだけで、かなしい唄が聞こえてくる。

私は、食べものたちが紙に包まれて売られていたころを知っている人間である。残念ながら、それが畠で作られたり海水から引き上げられたりしていた当時をうかうかと生きて、その現実に

ふれなかった。でもビニール以前の自然体の記憶はある。今は古物屋で求めねばならなくなった手織木綿の、古びた布に心は通う。

ところで、詩的言語は、それを発想するひとりひとりの存在の、生命の延長線上にあって、肉体の生理と無縁ではない。他のものと取りかえがきかないおのれの呼吸を、ことばがはらんでいる。そして、また、他者と共通の幻想を基盤ともしているのである。

私の肉体はいずれはくさって土の中へと消え失せることを、生きものの前提としつつ細胞は生成し消耗しているから、ことばが萌え出すのも、その呼吸のただ中からである。そのせいにちがいない、台所に立って、スーパーから買ってきたキャベツのビニールを引きはがす作業が、五年六年と重なるにおよんで、双面の鬼女のような、奇妙なこぶが、わが肉体に生じだした。化けものみたいだ、と思う。反自然というか、非自然というのか、ともあれ土に還らぬ物たちの不快さが、私をいらだたせる。

そして思う。布の感触と、ビニールのそれのひどいへだたりを。まるで別の体系に属しているように、私の中で、それぞれの詩の破片がちらつく。いっそう亀裂は深くなるだろうけど、肉体が感じとっている今を、まるごととらえるすべを見つけたい。思いもよらなかった姿へと変形する地球の人間群のひとりとして。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

詩的言語が萌える頃　目次

双面の鬼女 1
I
生活童話 9
時間をついばむ鳥のように 12
死者をも生かせる社会 15
茄子 19
母のこと 23
光の少女 26
教育の原点での自己と他者 29
若者とインドといのち 42
産むことをめぐって 62
産むことについて 75
II
住むところ 83

早春の月と太陽 88
マリア様の島 92
客間の肖像写真 99
なじみの食卓 111
地底の神と私 119
やさしさを教えてくれた女たち 127
ノン・フィクションとしての民話 134

Ⅲ

詩を書きはじめた頃 161
今、新しい視点のときに 165
一度みた学校 169
海を渡った女たち 173
地球村のびっくり子ども 186
戦中派の自戒は語るに重すぎる 193

すべての人が生きたがっている 197
つらい事件の中で 207
昭和を読む 219

Ⅳ

白い帯 235
移住者の感性を越えるもの 239
日本語とのつきあい 243
「アジア」を見据えて 247
ふとした一面 250
ヤマの男の魂に触れる 255
父性の輝き 259

あとがきにかえて 263
初出掲載紙誌 265

I

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

生活童話

自責の思いは深まりこそすれ、すこしも薄れないのだが、わたしの子どもがそれぞれ三つ四つのころ、死について問うた。「なぜ死ぬの」「死んだらどうなるの」「ママは死ぬこと、こわくない？」

その問い方も、なにげない遊びのあいだの思いつきとしてではなかった。ひとりで眠っていて、眠りが覚めた夜中の、しんと心が落ちついているとき、そのことをひとりで考えつづけ、考えきれなくてしくしく泣き、それに気がついたわたしに、問うたのだった。

わたしには答えられなかった。答えられないままに生きて、しかも子を産んでいることを、常の日にふりかえりふりかえり生きているのに、生まれてまだ三年四年の子が、それを問う。わたしはふるえが止まらなくなり、添寝をしつつ泣いてしまった。

「あのね、みんな、こわいのよ。でも、元気よく生きるの。ママも、あなたと一緒に、元気よく生きていくから。だから、元気で大きくなってね……」

神も仏も天国もことばに出てこない。ことばを聞こうとしているわけではない裸の魂が、感じ

られて、子を抱きつつその大きさ重さにふるえた。とても親とは呼べない自分が、責められたが、ただひたすら、一緒に生きるからゆるしてね、と、心が言う。

そのうち、子がわたしの背へちいさな手をのばし、撫でつつ言った。

「泣かないでね、もうこわいこと言わないから」

子どもから問われなくとも、子を産むときから、その問答にどう答えるか、つまりはどう生き合おうとしているのかを自問していた。そして答えにもならぬ答えとしてわたしが持っていたのは、生死をみつめる精神のしなやかさを育て合いたい、ということだけだった。わたしは子どもの掌のあたたかさに慰められ、ありがとう、と、つぶやいた。

あれからもう幾年も幾年もたっている。答え切れぬほどの問をかかえる愉しさ、を、知っていると言うのは、おこがましい。が、愉しくないと言えば嘘になる。

あの頃、わたしの子らは、ディッケンズの『クリスマス・カロル』の絵本がお気にいりだった。絵本の絵は青白い顔の男がふらふらと歩くシーンなどもあり、魂がその安らぎを探しあぐねつつ、なお、生きようと夢うつつに苦しむさまが、よくしのばれた。わが子が、何を、どう想像しつつ、その心をさまよわせているのか、わたしは汚すのをおそれるように、うかがい見ていた。

こうした幼児の心の世界が、そのまま人類の原初的な問であることを、わたしは大人になっていく娘と息子にみてきた。彼らが、わが身の苦悩としてしっかり受けとめてくれることを、はらはらしつつ、頼りなく、祈るほかない。洋の東西を問わず、文化がそれなりに生まれるのも、親

の子に対する自責の念によるのかもしれぬ。何かの答えを残そうとして。

そしてふと思い出す。十余年以前のこと。与論島がまだ観光地となっていない静かなソテツの島だったとき、島の人びとは、亡くなった人の、見えぬ魂へ向かって、生者に語るように話しかけていた。それはひとりごとのように普通の声で。食卓でも、拝所ででも。わたしにはふしぎな世界だったが、死者が生者とともになお日々身近にいるのだと感じとっている人びとは、その後沖縄を知るとともに、なお広い地域にわたっているのを知らされた。それは観念としてというよりも、しぐさや会話として日常生活化していたのだった。

それはわたしには暮らしの中に生きている童話のように思えた。子守り唄でもあり、親守り唄でもある。うらやましい世界だが、禁断の木の実を食べたのか、わたしには、血を流しつつさすらう問の連続しかない。

それでも、それが安息へ向かうものと思っているふしがあるのは、なぜなのか。

時間をついばむ鳥のように

その娘のふとした折の、手の表情がとても可愛い。あれ？　と、とまどった時など、軽く握った手を口元へ近付ける。誰にでもありそうなしぐさだが、人さし指になんともいえぬ可憐な表情がある。当人は知らぬことだから私は黙っている。茶碗の糸底を支えている指の表情もまたいい。いつのまに、何によってそんな自然な美しさが生まれたのかと思う。気付かれぬようにみつめて心にしまったことだった。

いつか東北の湯治場で、その娘の可憐な手つきがそのまま人柄に及んだような老女に会った。一人で雪解けの谷のそばで温泉につかっていた。出稼ぎに行って帰って来たところだと言った。年輪を重ねて、青くささも欲深さもごしごしともまれ、かまえることもなく生きる人の、はんなりとした生気があった。ははは、と笑いころげる。連れのカメラマンもその表情に打たれるのか、おばあさん写させてください、と言った。いいよ。老女のそぶりは少しもかわらない。湯あがりでうるんでいた。旅の話をしつづけた。

朝早く老女は野天の湯につかった。
「おばあさん写していいですか」
「いいよ」
早春の裸木たちがまだ固くしまった枝々を山肌に傾けていた。よくみると、梢の先にぽつりと角ぐむ芽がみえる。その老女の表情に似ている、と思った。
ういういしさは、年齢にかかわりなくはぐくまれるものなのか、それとも懸命に肉体を使い心を使って、ようやく蘇生力となるものなのか、山は寒いね、とたのしそうに彼女が言った。ああこの人、自信があるのだな、と思う。自分の生き方に自分でうなづいているのだ。誰にも押しつけずに。
洗面器をかかえ、綿入れのはんてんを着て部屋に帰り、野天風呂の先に咲いていたかたくりの花を彼女は洗面器に活けた。その花のそばで、お手玉を縫って遊びだした。鳥が鳴く。谷水の音がする。
このおばあさんは鳥のように自然だなあ、と私は思う。時間をついばんでいるように見えるのである。
「また働きに行かれますか」
「ああ行くよ、なんぼでも行くよ。人間、働かねばまいね(駄目だ)。自分で働いて自分で遊ぶんだもの、おもしろいよ。東京のＮＨＫセンターでも働いたよ。掃除婦して。そして働いたお金み

んな使ったの。伊豆大島やらに友達と行ったんだもの。おばあさんが家の中にじっと居ったら、若い人、つらいんでねえの。はあ、誰でも働かねばまいね。働けばたのしいんだもの」

かわいらしい小柄な人だった。その笑顔が別れたあとも心から消えない。

手の表情が美しいあの娘も、これから先、何かと不安を踏みわたり、いつか手も荒れるだろう。でも不安をやりすごす知恵を持ち、いくつもの失望も手にいれ、そしてあの老女の自由さを知ってくれたら、など、思いが及ぶ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com